長期化する不登校中高生の理解と支援に関する研究

―家族イメージに焦点を当てて―

14013PCM　平野　遥

問題と目的

1. 不登校とアタッチメント形成

文部科学省（2014）は，不登校状態が前年度から継続している状況に関して，長期化した不登校の子どもたちの対応の難しさについて報告している。その主な背景要因としてアタッチメントの形成不全が想定される（杉山，2007）。思春期から青年期にかけて，アタッチメント形成における課題を持つ子どもたちの不登校状態が長期化すると，パーソナリティ障害や統合失調症の発症のリスクが高くなることがいわれており，発症リスクをいかにして抑えることができるかが問題となる。

2. アタッチメント形成と家族イメージ

アタッチメントが上手く形成されると，自分にとっての安全な「基地」が内在化でき，安心して社会に出て行くことができる。このことが他人や組織との新たな関係性を築いていくことにつながると考えられるが，愛着形成に不全感を持つ子どもたちは，アタッチメント形成の対象となる母親・父親をはじめとする家族を，自分を受け止めてくれる「安全基地」としての家族として内在化できていないことが考えられる。そのため，安心して社会に出て行くことができず，不登校が長期化することが考えられる。

3. 本研究の目的

アタッチメントの形成不全を背景要因とする不登校生徒の抱く家族イメージと家族構造，及び生徒個人の心理学的課題の特徴について検討をする。また，生徒の個別事例を成育歴や現在の適応状況と統合して検討することで，彼らの心理社会的課題を理解し，今後の支援策へとつなげていくことを目的とする。

方法

研究協力者：不登校生徒を中心としたＳ学園に通う中学生４名，高校生４名（男性７名，女性１名）合計８名

調査内容：①FIT（家族イメージ法）研究協力者の家族構造を視覚的に検討するために使用，②KFD（動的家族画）研究協力者の家族イメージや欲求を検討するために使用，③心理検査（ロールシャッハ・テスト）研究協力者の心理的特徴を読み取るために使用。④学園が所有する成育歴，⑤学園での生活概要

結果：FIT と KFD との間に特徴が見られた５例について検討を行った。

（1）事例Ａ（中学３年，男子）

家族構成：母，本人

心理検査の結果から，愛着対象との基本的信頼感の未確立による自己感覚の希薄さや身体感覚の希薄さ，衝動コントロールの不安を感じていることが推察された。家族構造では，母子交流が少なく，家族の機能レベルの低さがうかがわれたが，家族イメージからはＡが母親との基本的信頼感の獲得を求めており，母親と一体感の中で安心したいという気持ちが読み取れた。

（2）事例Ｂ（高校３年，男子）

家族構成：父，母，本人

心理検査の結果から，母子の分離不安の課題を抱えていること，身体感覚の違和感，自我のコントロールの難しさが推察された。情緒的刺激に対する統制が難しく，アタッチメントの形成不全からパーソナリティ障害への移行が考えられる。家族構造は，母子の間に

割り込んできた継父の存在に戸惑いながらも関係を維持しようとしており，家族イメージからは，B の母親から頼りにされたいという願望が読み取れた。

（3）事例 C（中学 3 年，男子）

家族構成：父，母，本人，弟

心理検査の結果から，自我漏洩に対する防衛や，自分がなりたくない自分になってしまうのではないかという不安があることが推察された。家族構造及び家族イメージでは，家族から孤立している自分を表現しており，弟だけが両親に可愛がられることに不満を抱いていることが表現された。C は自分も弟のように可愛がられることを求めているが，両親から捨てられるかもしれないという不安から，何も言わずに弟のことをうらやましく思っている様子が読み取れた。

（4）事例 D（高校 3 年，男子）

家族構成：父，母，本人，弟

心理検査からは，自我統制力や知的水準の高さがうかがえた一方で，情緒的刺激を避ける傾向が推察された。家族構造では，凝集性が高く，両親が自分を見守ってくれていると感じており，健康的な家族構造が表現されているが，家族イメージでは，両親は D に背を向け，寂しそうな D の様子が印象的である。D の家族には情緒的交流が少ないことが推察され，D 自身自分の気持ちを表現することに葛藤を抱えていることが推察された。

（5）事例 E（高校 2 年，女子）

家族構成：父，母，本人

心理検査からは， E が温かみや優しさを求めていることや，孤独で抑うつ的な自己が表現された。また，対象を全体として捉えることができず，部分対象として捉えていたことから，ボーダーライン心性の可能性が推察された。家族構造では，両親と E の位置が遠く離れ，孤独な印象を受ける。また KFD が描けなかったことからは，「両親に近づいて，自分のことを愛しているか確かめたいけど怖くてできない」といった分離―個体化の課題を抱えていることが推察された。

考察

1. アタッチメント形成の課題と家族イメージ

FIT と KFD を比較してみると，家族との距離や家族の向きなどに違いがみられた。このことからアタッチメント形成不全の不登校生徒は，実際に認知されている家族構造で感じている体験と，家族内での内的体験では差があることが推察され，不登校生徒たちは現在の家族構造に不全感や，自分の気持ちとの差を抱いていることが考えられる。

2. 共生期の課題と家族イメージ

事例 A,B から，共生期の課題である基本的信頼感の獲得ができていない生徒の家族イメージは，FIT では母子が離れているのに対して KFD では母子が近くに描かれる特徴があることが示された。彼らへの支援として，構造化された活動と，彼らの体験を映し返す他者の存在の提供が必要であると考えられる。

3. 再接近危機と家族イメージ

事例 C,D,E から，再接近危機の課題が達成できていない生徒の家族イメージは，FIT では比較的健康な家族が表現されているのに対して，KFD では家族のメンバーが描かれなくなるという特徴が示された。彼らへの支援として，疑似家族体験をすることや，個別面接のように，特定の相手とじっくり話す機会を設けること，自分と家族との葛藤について振り返る内省の機会の提供が必要であると考えられる。